

---

innocent

mint

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

innocent

### 【コード】

N2308M

### 【作者名】

mint

### 【あらすじ】

在りえたりしそんな俺ら話。

? e v e r y d a y

「ライー おっはよー!!」

俺お名前は風李雷輝。フクリライキ

「んあー 樹羅、おはよ。ふあーねみい。」

こいつの名前は霞瑠樹羅。カリユウシユラ 俺お幼馴染だ。

「今日部活の仮入部だよー??強制だし。ライは何部ー??」

「マジかー??だりーなー。っても俺はミニバスやってたからバスケ部。」

ピカピカの中学一年生です。

ホントふつ のね。

つとまーこんな感じでいつもどーりの通学路を歩いていた。

「んじあ また後で!!」

「帰り6時なー。」

「うん!!」

俺、樹羅とクラス違うんだよねー。残念な事に。

とか思いながら下駄箱を開けた。

パカッ ザザザザザ

「うっあぁあー!!」

今時下駄箱にラブレター?!つつーか、量半端ねー。

この下駄箱結構入るんだなー。

俺は、ため息を付きながら少なくとも20枚はあるラブレターを拾った。

最近毎日これだなー。日に日に量増えてるし。

クッキーもある。俺なんかのために、こってるなー。

俺は、両手いっぱいラブレターやプレゼントを抱てながら教室に入った。

「おはよー!!ってお前毎日すげーな。クッキーうまそー!!」

これは俺の親友の檜波原爽海。カシハハラソウカイ

おまえも机の上にラブレターいっぱい乗ってるように見えんだけど…。

「おはよ。食べる?」

「うっそいーのー?!んじゃ いったーきまーす!!」

んまー。自分で言うのもなんだけど、いわゆるイケメンコンビかな。

「そろそろホームルーム始まるし、自分とこ行くわ。そのクッキーあげる。お腹減ってないし。」

「ありがと。ってか、お前今日テンション低くない??」

「ちよつとだるいだけ。大丈夫だよ。」

「ならいーけど。」

ホントだるい。っつーか、頭痛いし。

1時間目体育!!おいっ!!勘弁してくれよ。

「雷輝くん!!」

女子が、廊下から手を振っていた。

あつ、隣のクラスの子だ。名前なんだったっけ?

まいっか。と思いながら笑顔で手を振り返した。

「キヤー!!雷輝君が手振ってくれたー!!」

とか言つて、他の女子と走つてった。

女つてめんどい。

「ホームルーム始めるぞー!!」

担任来た。あれは担任のトド。

俺、本名分かんないし。皆トドって言ってる。

「風李。」

「ん? あつ、はい。」

今日1日生き延びられますよーに。

? out

1時間目。体育。

ホントだりー。頭割れそー。

「ソウ。俺、死ぬかも。」

「ええ!!!」

「雷輝くん、爽海くん!!!頑張つてえー!!!」

あつ、女子だ。確か2組の子だ。

俺?俺は4組。1年は、5組まである。

「がーんばーるよー!!!」

横で爽海が女子に向かって叫んでる。

俺も、手だけ振つとこ。

今日の体育とことんきつかった。

マラソン5?。俺1位でした。

でもなんかさつきよりもやばい気が…。

「ライ、大丈夫か?なんかすっごい顔が青白いしさー。保健室行くー???」

「んーん、いい。だいじょー…。」

バタツ。限界、死ぬ。

「ライー!!!大丈夫か!!!」

ソウの声が聞こえる。

「ライくん!!!」

女子の声だ。なんか俺情けねーな。

そのまま意識が薄れていった。

あつ俺だ。遠くにちっこい俺が見える。

そしてクリスタルのような透き通る刃をした剣をこっちに向けると、  
「リースヴィルバレンシア!!!」

と言った。

すると、あたり一面が血の海と化した。

何じゃこら　　！！！！

ガバツ。俺は、ベットから身を起こした。

夢か。心臓止まるって！

にしても…

「あーライ起きたの?!大丈夫??」

樹羅だ。うわー、廊下人やべー。

女子だらけだし。

「俺どうしたの???ってかソウは??」

「ライったら、体育終わった後渡り廊下で倒れたんだよー!!熱40度もあつてマラソン1位とかありえないでしょ!!ソウはトイレ。」

樹羅もソウと仲いいんだよねー。俺ら幼馴染みたいなもんだし。

俺はもう1度ベッドに横になった。さっきの夢やっぱなんか引つかかる。

ガラガラガラ。

「ソウ。」

「ライー!!大丈夫かー??心配したんだぞー!!」

「だぎずぐなく・る・じ・い!!」

「あつ、ごめん!!」

あー、また熱上がってきた。ヤバイなー。

「保険の先生起きたら早退させるように言ってたけど、私たちまだ授業あるし…。」

「1人で帰るからいーよ。今何時??」

「そろそろ5時間目始まる。ライ、腹減ってない??」

今なんか食べたら吐きそう。ってくらい気分悪い。

「大丈夫。ソウ靴持ってきてくれてありがと。んじあー。」

つと言い、靴を持って保健室を出て行った。

「ライ君大丈夫??」なんて心配そうにしている女子に囲まれながらなんとかフラフラと玄関までたどり着いた。

俺ほんとに家までたどり着けるかな??

いつも歩いている通学路が、今日は長ーく感じた。

やっと家着いたー!!

っ！か今何時だー??と、思っで携帯を見る。

学校から家まで30分もかかってんじゃん!!

いつもなら10分で着くのになー。どーりで長いわ。

なんて思いながらシーンと静まり返っている家の中に入った。

父さんと母さん仕事だよなー。あー、頭いてー

俺はフラフラと階段を上り自分の部屋に向かった。

とにかく寝よ。薬…もーいーや。

ドアに張り紙がしてある。「雷輝ゴメンメンネ ママ」

ママ言うなっつってんのに!!とりあえず部屋の無事を確認しな  
きや。

と思ひドアを開ける。

ガツッ!!なんか踏んだな。それにしても…

「いつて …!!…!!…!!」

土踏まずぬ入ったってー!!

母さんだなー!!病人こき使わせんなよー。

にしても何だこれ?

なんて思っで拾い上げてみる。青いサファイアのような宝石がきら  
めいていた。

「ペンダント??」

母さんが落としたんかなー。俺のじゃないし。

そう軽く考へてテーブルの上に置いた。

そして俺はベットにもぐり眠りに着いた。

またさつきと同じように幼い俺が見える。

服はヨーロッパの貴族みたいなかつこ。

何より不思議なのが、手に持っている剣。さつきの夢と同じあの剣





俺の手には剣が握られていた。  
そう、夢で幼い自分が持っていたあの剣が…。

? dream and reality

まず頭の中を整理する。と…、  
ペンダントを見つける。ペンダントヲ自分の首に掛ける。ピカーっ  
てなる。剣がある。

つて、整理しても全く意味分かんねーよ!!  
この剣どーすれば消えんのかな?

まー、面白そうやしなんかやってみるか。

好奇心で振ってみた。

バアー!!

竜巻(?) 見たいな大風が起こり、自分の周りにある鞆や服が空中  
に浮き始めた!!

これ、どーすれば元に戻るんだよー!!

っと思ひ、もう一回振ってみた。

ピタッ。

全てが止まった。

空中には部屋にあるものがたくさん浮いている。

うわっ! 時計も止まってんじゃん!!

俺は窓の外を見た。

歩いている人も鳥も、全てが止まっていた。

すげーよ俺!!

これもつかい振ったら元に戻るんかな?

シュッ!! ドサドサドサドサ。

「いってー!!」

空中に浮いてたもにがいつきに俺の上に振ってきた。  
時計も動いている。

これ、他になんかできんのかな?

なんて考えてるうちに寝た。

誰かに呼ばれて目がさめた。

「雷輝ー、大変なんだよ！！起きろー！！」

爽海が「雷輝」なんてフルネームでで呼ぶなんて珍しい。

「んだよ、俺頭痛いでもうちよい寝る。」

つと言いつて布団を被った。

「あーそうやった。んじゃー早速。」

「アルフェストスイーラリスト！！」

俺に向かって銀色のステッキを振った。

「ええええええ？！」

不思議な事にだるさが全く消えた。

「お前、もう知ってたんだろ？？剣でてるし。これかたづけといた方がいいよ。」

「いやー、俺かたづけ方分かんねーし。っつーか、今日初めて出したから。」

「嘘だろ　　！！！！」

「まーそんな事はどーでもいい。お前の父さんがヤバいんだよ！！家の前で樹羅が待ってるから。」

何が、どーなってるんだ？父さんがどーしたって！！

「早くー！！」

「あつ、うん。」

急がされるままに、俺は家を出た。

? best friend

家から出ると、樹羅が「待ちくたびれた。」という様子で待っていた。そして、

「遅い。行くよー!」

つと2言。

んで、どこ行くの?と訊こうとしたが、2人はそれどころではなさそうだ。

父さんそんなにヤバイことなってるのかなー?

んなことと思ってるうちに、2人は何やらごによごによと唱えてほうきを出していた。

ええ!ほうき!どっから出てきたんだよ?!

「乗れ。いくぞー!」

つと言われて、無理やり乗らされ、ビューン!!

「ちよつといいかなー?俺全然意味分かんねんだよねー。まさにマジカルドリームって感じだったりする??」

そーなんです。今飛んでいます。しかもかなりのスピードで。

100?でてるぞ、これ。

「あーそーだったね。ライ何にも知らなかったんだっけ?まー、ザツと説明すると…」

そー言つて2人はザツではなく、長い話を始めた。

こことは違う世界、つまり異世界の中に、「ラデイス王国」という国がある。

ラデイス王国は異世界の中で一番大きな国であり、国王は雷輝の父、レオであり、王妃は雷輝の母、アルラである。つまり雷輝は、王子という事だ。

異世界では大きく分けて2種類の人がいる。

1つは、魔法使い。そしてもう1つは、魔法を使えない普通の人間

(地球人)である。

魔法使いは生まれた家によって魔法をかけるときに使うものが違い、「剣使い」「杖使い」が代表的。

剣使いは、雷輝のように剣を使い魔法をかける魔法使いの事。

普通の剣使いは剣を小さくしていつも持ち歩いている。雷輝は王族という事もあり、少し特殊だ。

杖使いの方は、爽海のように杖(すなわちステッキ)を使い魔法をかける魔法使いの事。

剣や杖は人それぞれ合う合わないがあり、みんな、自分に合うものを探す。

そして、5歳以上の魔法使いは、みんなほうぎに乗れる。

「そしてたつた今、隣国の「バルマ共和国」が、ラデイス王国を支配しようとして攻めてきたのよ!!」

「国王と王妃は誘拐されてしまった。俺たちはその知らせを聞き、いったんラデイス王国に戻ったんだ。」

「ラデイス王国はと化してたわ。そんな中私たちは、誘拐現場の2人のスイートルームに行ったの。なにかメッセージを残しているかももしれないと思ったのよ。」

「俺たちの予想は的中した。ドアを開けるとじゅうたんに文字が浮かび上がっていたんだ。」

「じゅうたんには、「この国の王子である私の息子の、ライキを連れて来い!!あの子を私の代わりに国王に任命する!!」って書いてあったわ。」

「だからいそいでんや。了解。」

「了解じゃねー!!俺何すればいいんだよー!!」

「ライ、そろそろ着くよ。スピード上げるからつかまってなー。」

「1つきいてもいい?」

「ん?どーぞ。」

「ソウと樹羅はいつたい俺の何なの?」

「従者だ。だけど、少なくとも俺はそんな事思ってない。」

「どーゆーこと??？」

「俺は今まで従者だからお前のそばにいたんじゃない。俺がお前と一緒にいたいからいたんだ。異世界に行ったら、俺とお前は身分も居場所も違う。それでもお前はずっと俺の親友。でいてくれるか? ソウ…。泣かせること言ってくれんじゃねーか。」

「もちろんだ。俺はお前と一生親友だって誓うぞ!!！」

「俺も!!！」

こんなところでハグすんなって! 恥ずいし、落ちるし(地上に)、何よりも樹羅ガンみしてるって!!！」

「何男同士いちゃついてんのよー! もう扉が見えてきたわ。行くわよー!!！」

「ちげって!! おおおいまてー!!！」

そして俺らは、空中に浮いている透明の扉(窓みたいやけど扉らしい)に吸い込まれるように入ってしまった。

このときの俺はまだ、この先起こる数々の出来事を何一つ知らない、「のんきな俺」だった。

? palace

「うおおー！！すげーなー。」  
まさに「未知の世界」って感じ。

「ライ。王宮内ではあなたの事を王子と呼ぶわ。王子ここはラディス王国の王宮です。あなた様にはこれからこの王宮の王子専用のスイートルームにご案内します。」

「ここが王宮か。なんか親友に敬語で話されるとかなしーな…。」

「王子はまず休養をおとり下さい。朝の7時に使用人が起こしに参りますのでご仕度が出来次第、私たちをお呼び下さい。これに水晶番号が登録してあります。どうぞお持ちください。」

「そう言っつて、ソウカイは俺にクリスタルの板のようなものを渡した。ソウカイも敬語じゃんか！！正直イヤだ。」

「2人とも敬語で喋んな『それは出来ません！！』はもった！！っつて、そこじゃないだろ俺！！」

「私たちは単なる貴族騎士です。」

「ですからどうぞお気になさらず。」

「単なる貴族騎士ね。っつても、「貴族」の「騎士」っつてかなり位上じやね？」

「だっつてみんな、敬礼してるし。」

「んで、俺いつたいこれからどうすればいいんだ？」

「着きましたよ。これが王子専用のスイートルームです。私たちは向かいの部屋に待機していますので。」

「それではごゆっくりお休み下さいませ。」

「そう言っつて2人はスイートルームを出て行った。」

「っつてここはかつてに出てくなくなっつて！！いくらなんでもこんな広い部屋に1人は寂しいだろー！！」

「俺は部屋全体を見回した。どんだけ広いんだよ！！」

「自分が今いる部屋だけでも、天蓋付きベットや金ピカのドレッサー、



キラキラ光るシャンデリアなど、今までに見た事のないものがたくさんある。

とりあえず風呂入るか。っと思ひ、バスルームを探し始めた。ドレスルーム、図書室、寝室、応接室、シアタールーム…そしてまた天蓋付きのベットがいつぱい並んでいる寝室……、  
が…、歩いてても歩いててもバスルームがない。どんだけ広いんだよここ。

さあどうする俺。ああー！そうだ！！

さつき貰った水晶でソウカイにきこーつと。

そう思ひ水晶を取り出した。なんか書いてある。

<メニュー>

・連絡先

・パスポート

・近辺地図

・インフォート

「インフォート」って何だ？まあ明日ソウカイとジュラに聞いてみよう。って、

地図あるじゃん！！

俺はすかさず「近辺地図」のところを押した。

すると、水晶から立体画面が飛び出し俺の前に映し出された。

何だ簡単じゃん。バスルームわーと…あつた！！

この部屋の横じゃん！！あーなんかイヤンなる。

そしてバスルーム。またまたでかすぎだろー！！

シャワー10個にジャグジー。バラの花浮いてるし。

「自動洗い」って何だ？

俺は興味本意で押してみた。　ジャー　ブクブク　ジャー　ゴシゴシ……。

なんか、洗濯物になったみてー。でもスッキリ。

バスルームから出ると下着とバスローブが用意されていた。

バスローブなんて初めてだな。なんかうれし！

着替えた俺は、第1寝室にもどった。(第1、第2で分けた)

ベットに入ると、ベットは俺に合わせて形を変えた。

きもちー!ー!さいこーじゃんか!ー!

俺はとりあえず、明日に備えてぐっすり寝ることにした。

今日はいろいろあってほんとーに長ーい1日だった。

?      d e t e r m i n a t i o n

「おはようございます、ライキ王子。」

あー眠みーい。メイドさん(?) 起こすのはえーって。

そっか、7時起床やったっけ… 俺はゆっくりと体を起こした。

「お目覚めの時間ですよ王子。ご朝食はそちらのテーブルの上にご用意させていただきました。ご朝食が終わり次第、ここにご用意いたしましたお召し物にお着替えになってください。あと、ソウカイ様とジユラ様からご連絡を入れて欲しいとのことです。それでは失礼いたします。」

メイドいっきに喋ると部屋を出て行くこうとした。

「ちょーと待った!! メイドさん、お名前は?」

「そんな…、私は名前を名乗るような者ではありませんので。それ「そんなこといーから!!」

「名前を名乗る必要とかどーでもいいからさ。メイドさんって呼ぶの変だからさ。」

俺言い方きついかない?でも聞きたいし。

メイドは少し驚いた様子だったが、にっこり笑ってこう言った。

「私の名は、レイシーと言います。王子のように私を気にかけてくれる人は初めてです。ありがとうございます。ラデユスの王宮には、たくさん使用人がいますので、なかなか会えないと思いますが、私は、王子に使えられたことをとても光栄に思います。 それでは、失礼します。」

俺は、レイシーが笑ってくれたことがとても嬉しかった。それは彼女が、今まで1度も笑ったことが無いとも言えそうな、悲しい顔をしていたからだ。

レイシーに言われたとおり俺は、朝食をとることにした。

朝食はごく普通のもので、ブラックコーヒー、クロワッサン、グリーンサラダなどなど。

俺ブラックコーヒー苦手なんだけど…シロップシロップと。  
って、ないじゃん!!

さあどうする俺。これはいつきにくしかない。そういつきに!!  
そうして俺は…飲みましたよそりゃーね。頑張って初ブラックを。  
予想通り苦いですね…。

朝食を(なんとか)食べ終えた俺は、用意された服に目をやった。

なんか見覚えある。

あー!!これ俺のじゃんかー!!通りで見覚えあるわ。ソウカイ俺  
の部屋からパクってきたんかな? まーいや。

俺は置いてあったキャラクターTシャツとズボンに着替えて身支度  
を済ませた。

そろそろ、ソウカイとジユラに電話しようかな。と、思っていたそ  
の時…、ガチャ。ドアが開いた。

「おはようございます王子。ご用意の方は整いましたでしょうか?」

「おはよーソウカイ。今丁度、連絡しようとしたとこだよ。」  
部屋に入ってきたのはソウカイだった。

っにしても、柄にあわねー喋り方だな。着てる服もこえーし。

彼は、甲冑の上にローブをはおる、という格好をしていた。

「そうでしたか。かつてにドアを開けてしまい申し訳ありません。

王子には、今から開かれる会議にご出席して頂こうと思っています。  
ご用意も整っておりますようですし、ご案内 したいのですが…。」

「それはいいけど、その喋り方やめてくれない?」

ソウカイは辺りを見回し、俺たち2人以外誰もいないことを確認し  
てから喋りだした。

「イヤー…。俺もこんな喋りかたじゃ喋りづらいし、正直タメの方  
がいいけどさ。俺らは皇族と、タメで喋っていい身分じゃないしさ。  
ごめんな。」

「ソウカイが謝ることじゃないよ。でも俺、このままずっとこんな  
のはいやだな…じゃあ、せめてソウカイとジユラと俺だけんと「王  
子、ソウカイ様!!」」

ドンッ！！ キー、バタン。 うわー。 ドア壊したしー！！  
すっごい勢いで血だらけの兵士が入ってきた！！兵士は息を荒げな  
がらこう続けた。

「国境の守備が破られてしまいました。後数時間でバルマ軍が攻め  
て来るでしょう。ですか「何ですって！！」

なんとジユラ登場！！お前も甲冑かよ……あつ！ローブ同じじゃん。  
ジユラのんきな顔をしている俺のことなんて気にもせず、話を続け  
た。

「いったい何があったの？ラデイス軍がバルマ軍に負けるはずなん  
てないわー！！」

兵士は、ジユラのものすごい形相におどおどしていた。

「申し訳ありませんジユラ様！！バルマ軍は死の宝石の1つ「ムー  
ンの石」を持っています。王の首にかかっていたペンダントの宝石  
は……おそらく間違いはないと思います。」

何の話だつてーの。せつめーは

「そんなわけないわー！！バルマ王が、伝説の封印を解けるはずない  
もの！！それに、あの封「あー……」

「ライー！！あなたは黙ってなさい！！事情は後で話すわ。とにかく  
今は時間がないの。ソウカイ、あなたはライを連れて地球に戻りな  
さい。」

「お前はどーするんだよー！！」  
ようやくソウカイが口を開いた。

「私はここで待ってバルマ軍と戦うわ。できる限りの時間稼ぎは「  
いやだ。」

「なっ何言ってるのよー！！時間がないんだから早く行きなさいって  
ばー！！」

「イヤだつてんだよ。3人で行く。お前がどーしても行くってんな  
ら俺が替わりに行く。」

「だめよ。私はライキを守れない。だからあなたじゃないとダメな  
の。」

2人とも俺のせいでもめてる。俺は心の中で決心し、2人にこう言った。

「俺も戦う。」

2人は驚きで目を大きく見開いた。

「ダメに決まってるんだろ！お前が死んだら国は滅びる。お前は国の最後の光なんだからじゃんか。」

「だからこそ、王子である俺が逃げちゃいけないと思う。俺がこの国を守らなきゃいけないんだと思う。俺は誰がなんと言おうと戦うよ。もう決心した事だし。俺もみんなとう。」

「らいきい〜」

ジユラは泣きながら俺に抱きついてきた。なんかかわい。俺はジユラの頭を撫でながら、首に付けているペンダントに手をやった。

ピカッ！！ 予想通り。俺の手には剣が握られていた。

先ほどからこの光景を目にしていた兵士は、驚きでライキの方を直視していた。

「ずずつ とつ、とにかく行きましよう。状況は行きなが ずずつ

らざつと説明するわ。 ずずずー。」

ジユラは涙ぬぐい、鼻をすすりながら言った。

「案内してくれ。」

ソウカイは兵士にそう言うと、空中に手をかざしほうきを出した。

「ライキ乗れ。」

「あつ、うん。」

この先、俺たちがどうなるかなんて出れも知らない。分からない。だが俺は、この選択に間違いはないと自分の全てに誓って言える。俺は、自分を信じる。

? believe

今から約1千年前、ここ異世界には「サンプルピア」と「ムーンルピア」と呼ばれる、2つの大陸があった。

大陸同士の仲はとてもよく、人々はガラスでできた橋と利用して大陸を行き来していた。

平和で暖かで、全ての人々が何の不自由もせず暮らしていた。少なくとも表向きにはそう見えていた。だが現状は違っていた。

ある日災いは訪れる。

サンプルピアの平民が反乱を起こし、王宮に攻めてきたのだ。数人も数十人でもなく、数百人という壮大な人数の平民が。

原因は「貧富の差」だった。優々と暮らしていたのはお金持ちの貴族や仕事のある一部の平民たちだけで、仕事のない貧乏な平民が大陸の人口のほとんど占めていたという。

貴族たちには「溝鼠」と言われ、お金ももない 家もない 靴なんて履いたこともない 食べ物なんて3日に1度口に出切れればいい方 毎日、いつ死んでおかしくない生活を送っていた。

彼らの狙いは「王」だった。だが、平民たちは肝心な王の姿など眼にしたことはなかった。そう、見ることにすら許されなかったのだ。理由は1つ、王に謁見を申し出た者たちは、みんな殺されてしまったからだ。

彼らは憎しみで満ち溢れていた。 王さえ死ねば 王さえ殺してしまえば 王を殺しても何にもならないということは分かっていた。だが、何も無い彼には憎しみさえ晴らすことができればそれでよかった。

そして反乱は成功してしまった。兵士たちは平民たちの憎しみの塊に勝つ事ができなかったということだ。

それに、平民はけして魔術が使えない地球人ではなかったから。そう、この時代には地球人など存在すら知られていなかった。

辺りは血の海と化し、赤く 黒く 染まっていた。  
そして王も殺された。しかし殺されたのはわ我が大陸の王だけでは  
なかった。

殺してしまったのだ。もう一人の王を。

ムーンルピアの人々はこの事を王に付き添っていた兵士から聞くと、  
サンルピアを「裏切り者」と見做し攻撃を始めた。

サンルピアの平民たちの王への憎しみ 何も知らない貴族達の戸惑  
い 一瞬にして殺された王宮の人々の痛み、叫び

このような人々の感情の塊から2つの闇の魔力が生まれた。

異世界の全ての人々が闇に魂を食われていった。

その時、1人の少年が闇の力を封印しようとする闇に向かい封印の魔術  
をかけた。

その少年の力はいえてはいけないほど強力で光にあふれていた。

そう、その少年はこの世に存在するはずのない「光の魔術」を使え  
る人間だった。

2つの闇はその少年の手によって光の魔術で封印され、2つのブラ  
ックダイヤモンドとなって異世界の時の<sup>時空</sup>中に流された。

いつの、どの時代に現れてもおかしくないと言う事だ。

そして、その闇の魔術を阻止し、もう1度封印することができるの  
は光の魔術を使える人間だけ。

しかし、1千年前に現れたその少年以来、光の魔術を使える人間は  
現れていない。

俺は、戦場に向かうソウカイのほうきの上で、ジュラとソウカイの  
説明を聞いていた。

せつめーってか歴史語り?!

まーそれは置いといて… バルマ軍の「ムーンの石」に勝つことが  
できるのは光の魔術<sup>光の魔術を使える人間</sup>師だけ。

で、いないってことは… 負けるじゃんか!!!!!!

「ソウカイ!!! 光の魔術を使う方法以外に闇の魔術に対抗する方法



つてないのか?!?!?!?!?!

「残念だけどないね。だけど、石を奪っちゃえばこつちのもんだし。」

「あー、なるほど。さすがソウカイ君！ つて、そんな簡単に…。」

「なるほどねー。」

ジユラも感心してる。

「でもそんなに簡単に行けば私たちは必要ないはずだわ。はあ、どうすればいいのかしら…。」

ばっごーん ヒューー ガン ドカーン どさ カチャ どす ……

……………

兵士たちが倒れる音、魔術の光が飛び交う音などが、俺たちの耳に響き始めた。

「皆様！！そろそろ目的地の戦場にご到着します。私は皆様より一歩お先に戦場へ参ります。」

案内をしてくれていた兵士が言った。

「それでは皆様のご検討を心からお祈りいたします。」

そして、ピカッ 光と共にほろろと消えていった。

「私たちがものんびりしてるわけにはいかないわ。何があってもずっと3人一緒よ！！」

「もちろんだよ！！」

「当たり前だろ?!」

はもった?! つてか、かぶったつて感じ?!

俺は剣を ソウカイは杖を ジユラは鎌を それぞれ自分の手の中に握っている。

(ジユラの鎌は始めてみたがキラキラ光る赤い鎌だった。)

「みんな絶対に死ぬなよ！！」

お前が1番あぶねーよ、ソウカイ。

何があっても俺は2人を見捨てない。自分の命をかけて2人を守る。信じ続ける。

「いざ、戦場へ。」

もう逃げられない。

戦争というゲームはすでに始まっているから。

ゲームスタート。

? love again

俺らがそこに着いたときにはもうすでに、その場所は血の海と化していた。

そして目の前には、まるで砂漠に打ち上げられて干乾びてしまった魚のように、たくさんの死体が転がっている。  
そう死体の海のように…。

「ライ、あなたは剣の使い方どれくらい知ってるの？」  
俺たち3人は、近くの森で作戦会議をしていた。

「いやー。あんま…。んゝ…な「ヒュツ!」」  
「ジユラ!」

間一髪。今飛んで来たの何んだよ?!  
ソウカイはそれを拾い上げ念入りに見てこう言った。

「光の毒槍だよ。刺さったら死ぬよ。魔法で治すのも不可能だ。狙われてるのはたぶん…ライキだよ。」

ソウカイやけに冷静じゃん。どーしたんだろ、俺なんかしたか?  
「そろそろいい?」

なんかしたから声が…ってあああああ!!  
「あつ ごめん。」

俺ジユラのこと押し倒してたんだ!!なんか俺まで冷静っぽくなってるじゃん!!

ザク ザク ザク ザク ザク  
「誰か来るわ。消えるわよ。」

えっ?!消えるって サツ ジユラがいきなり抱きついてきた。  
これ反則だつて

!!!!胸当たってるしーギブギブギブギブウ  
!!!!

「ライ。じっとしててね。私から離れた瞬間魔法が解除されちゃう



「!!!!!!!」

「お怪我はありませんか?!先ほど大変大きな爆発がありましたか  
:。」「  
「驚かしてしまってますみません。先ほどの騒ぎは俺のせいなんです。」

「本当ですか?!私たちはつきり相手軍の手違いによるものだと  
思っております:。」

「我々は今からバルマ帝国のシアリアス城に攻め込み、王を救出  
しに行こうと思っております:。」

「お言葉ですが総司令官、1度王宮に戻り会議を開いた方がよろし  
いと思います。」

そつ、総司令官?!

「さすがジユラだ。俺の息子とは大違いだ。あちらにジェット機が  
止めてありますので、ご案内します。」

ソウカイ切れてる。切れると髪の毛触る、こいつの癖。

「横、座ってもいい?」

ジユラだ。こいつも親が総司令官みたいになごかつたりすんのかな  
!。

「うん。いーよ。」

「ありがとう。ライキ大丈夫?」  
「なっ何が?」

「1度にたくさん魔法を使いすぎると過労で倒れたり、貧血起こ  
したりする人多いから:。」  
「全然平気。ジユラこそ大丈夫?今日は俺のせいいろいろ疲れた  
だろうしさ。」

「心配してくれてありがとう。ライはやっぱり優しいわね。」  
「いやー、そんなことな」  
チユツ

えええええええええええええええええええええええ!!!!!!!!  
!!!!!!!

きつキツキツキス!!キスしたって!!

ジユラが喋っているライキの首にキスをしたのだ。

「俺、女子からキスされたの初めて。」

なんか冷静なコメントんなっちゃったじゃん!!

「じゃあ自分からはしたことがあるってこと?」

ジユラかわいすぎ!。そんな顔で見つめられたら誰だって誤解しますよ。

「ない。俺、彼女いない暦12年だから。」

「あー、そっかー。何で彼女作らないの?ライモテるし、中学入ってから毎日告白の嵐だったじゃん!!」

中学入ってからって、たった数日だろーが。嘘じゃないけど、まあこれにはふかーい理由がありました…。

「小学校から片思いしてる人が居ますんで、全部振りました。」

「聞いたら怒る??」

ジユラには絶対教えない。

「怒らないけど、絶対言わない。」

「えーなんでー?!」

だって……。俺の好きな人はジユラだから。

そして、ソウカイの好きな人もジユラだから。

俺は友達を裏切れない、情けないやつだから。

「ジユラは好きな人とかいないの?」

「んー。王宮に着いてから話す。でも、ソウカイには内緒ね!!」  
無理だ。多分俺はその約束を守れない。

「うん。」

俺はあいまいに返事をした。

「あやしーなー!絶対だよ!!」

「大丈夫。言わないよ。」

もし、ジユラの口から出た言葉がソウカイに言えないような事だったらどうしよう…。

だからといって、ソウカイだったらそれはそれで悲しい。

ずっと片思いしてきた俺は、ソウカイと同じぐらい……いや、それ以上  
上にジュラを好きだって言い切れる。

忘れなければいけないと思っていた恋が、今のキスで再び目覚めた。  
俺はどうすればいいんだ？

そんな不安にかられる中、俺はジュラの隣で深い眠りについた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2308m/>

---

innocent

2011年10月7日08時28分発行